仮面ライダージオウ
STRIKE WORLD

いちごDF

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ケテルを倒したルシファー。これで解決するかと思ったが、ガブリエル、ミカエル、ラファエル、ウリエルの四人が目を覚さない。

彼女らを目覚めさせるには五人の天聖を倒さなければならない。

それらを倒すための作戦を立てようとした時突如として我々の知る『ストライクワールド』は消えた。

その影響は『仮面ライダージオウ』の世界にも出ていた。この異変を止めるため、ソウゴ達は変わり果てたストライクワールドに向かう。

ジオウ側は映画『仮面ライダージオウ　Ｏｖｅｒ　Ｑｕａｒｔｚｅｒ』の世界線と

なっております。

なお、物語の展開上ジオウ側がメインとなって進みます。

目次

２０２０：繋がる異世界 ―― 1
４つの紋章 ―― 15
王国の英雄 ―― 26
青の紋章 ―― 38
偽の救世主と厄災 ―― 45
叡智の魔術王 ―― 54
創造の堕天使 ―― 64
王にふさわしい者 ―― 72
２０１８：最高最善の魔王 ―― 82

２０２０：繋がる異世界

「会ってほしい人たちがいるんです！」

今にも飛び出そうとしたルシファーはビナーの言葉に動きを止める。

ビナーの話を聞くことにしたルシファーは空中から降り、ビナーについて行く。

話を聞いていくと、各ワールドを代表する実力者が集結し、大いなる敵と戦う、とのこと。

取り敢えず会ってみて決めてほしいと言われ、その実力者達が集まっている部屋の扉を開けた。

そこには４人の人が立っていた。

沢山の生き物の命を救った英雄『ノア』

ノアと共に生き物を救った『パンドラ』

天聖マルクトの野望を打ち破った英雄『ソロモン』

魔の手から王国を救った英雄『アーサー』

一人一人が何かしら救っている英雄達だ。

もしこの４人にルシファーが加われば敵なしだろう。

４人を一通り見たあとルシファーは一息ついたあとこう言った。
「断る…　っ!?」
断る。そう言った瞬間、彼女達がいる部屋がこの世界全体が歪んだような感覚否、感覚ではない。実際に歪んでいるのだ。
突然の出来事に驚く一同。するとその次の瞬間、もっと驚く出来事が起こり始めた。
「なっ!?体が…　避けている!?」
そう、ルシファーの体が透け始めたのである。
他の英雄４人達は、ルシファーが体が透け始めた瞬間にノイズのように体が揺れ始め、そして一気に姿が消えた。
「ルシファー!!大丈夫ですか!?」
ビナーがルシファーの元へ走ってくる。ルシファーのことを心配しているが彼女もまたルシファーのように体が透けて始めている。
「人のこと心配している場合か！お前も私も同じ状況だ。まずは何が起こったのか把握しなければ…　！」
さすがは歴戦を生き延びただけあってまずは状況把握を試みようとする。
周りを見渡すと、先ほどと何も変わっていない様子。
ここからは何も情報が得られない。そう考えルシファーはこの場を後にしようとし

た。
　するとビナーがルシファーを呼び止めた。
「ルシファー!あれは…　!」
　ビナーが指差す先には何もない空間から穴が開き始めていた。
　得体の知れないモノに二人は警戒する。
　その穴が人が通れるぐらいの大きさになると、そこから3人の男が現れた。
「ここがオーマジオウの言っていたストライクワールドってところか」
「たしかに未来の我が魔王が言っていた通り、この世界はかなり時空が歪んでいるね」
「この世界に来たのはいいものの、一体ここからどうするんだ?ジオウ」
「お前達は誰だ!?この現象と関係あるのか!?」
　こちらに全く気づかず、3人で話を始めている男達に向かってルシファーが声を荒げて聞く。
　すると『ジオウ』と呼ばれていた青年がルシファーに向かって自己紹介を始めた。
「君たちがこの世界の住民だね?俺は常磐ソウゴ」

　時は少し前に遡る。
　時の王者、仮面ライダージオウに変身する青年、常磐ソウゴはこの日も平和にクジゴ

ジ堂で同居人の妙光院ゲイツ、ウォズ、そしてツクヨミと部屋を貸しているソウゴの叔父さんと一緒に昼食を食べていた。
「ソウゴ君、やっぱり笑顔が増えたよね」
「そうかな？叔父さん」
「我が魔王が笑っている姿を見ていると私も嬉しい気持ちになるよ」
「あの件以来から何も無く平和だからな。多少は余裕ができたんだろ」
「そうね。私たちがいた時代から見ればこんなに平和な時代は考えられてなかったわ」
　和気藹々と話が盛り上がっていると、ある奇妙なニュースがテレビで報道されていた。
『今朝7時ごろ、羽の生えた人型の物体が空に飛んでいました』
「羽の生えた人型ってまるで天使だね！」
「バカを言うなジオウ。天使なんてものが現実に存在するわけがなかろう。あり得ないな」
「ゲイツ君、それを言うなら私たちだってこの時代から言わせてみればあり得ない存在じゃないのかい？」
「ん？ゲイツ君達は何の話をしてるのかな？」
「なんでもないよおじさん！ほら早く食べないと俺がおじさんの分食べちゃうぞ！」

これからも平和な時間を過ごす。そう思っていた。
だが、それは今この時崩された。
ソウゴが最後の一口を食べた瞬間、近くで何かが爆発した音が聞こえた。
こんな世の中で爆発音。もしかしたら先ほどの天使?に関係しているのではと思ったソウゴ。
それはゲイツ、ウォズも同じようで、水を一杯飲んだ後立ち上がった。
「ちょっと3人とも!どこにいくの?」
「ちょっと外見てくる!夜までには帰るから!」
ソウゴがおじさんに誤魔化して説明し、3人はこの場を去った。

爆発音が聞こえた場所にたどり着くとそこには鎧を纏い、羽の生えた人が軽く数えても１００人は超える人数がいた。
「アナザーライダーでは無さそうだな」
「ウォズ、何か分からない?」
「申し訳ない我が魔王。私も初めて見るよ」
未知の敵のを前にソウゴは少しワクワクしていた。
「こうやって3人で戦うのって久しぶりだね!」

「そうだな」「そうだね」
「じゃあ久しぶりに運動しますか！」
『ジオウⅡ！』
『ゲイツ！』『ゲイツリバイブ疾風！』
『ギンガ！』『アクション！』
　それぞれのベルトから待機音が流れだすと、背後に時計が現れる。
「「変身！」」
『ライダータイム！仮面ライダー！ライダー！ジオウ！ジオウ！ジオウⅡ！』
『スピードタイム！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイ！リバイブ疾風！』
『投影！ファイナリータイム！ギンギンギラギラギャラクシー！宇宙の彼方のファンタジー！ウォズギンガファイナリー！ファイナリー！　』
　ソウゴはジオウⅡに、ゲイツはゲイツリバイブ疾風に、ウォズはギンガファイナリーに変身完了した。
「一気に倒すぞ！」
　ゲイツは持ち前のスピードを活かしてジカンジャックローで天使達を倒していく。
『つめ連斬！』

空中に飛んでいる天使達をジカンジャックローの必殺技で撃ち抜いていく。
「久しぶりの戦闘にしてはセンスが落ちてないじゃないかゲイツ君。私も負けてられないね」
『ファイナリービヨンドザタイム！』『超銀河エクスプロージョン！』
ウォズが右手を空にかざす。
すると上空から無数の隕石が天使達目掛けて降ってきた。
ゲイツとウォズの活躍によって大量にいた天使達は残りわずかとなっていた。
「二人ともすごいなぁ」
一方、ジオウはリーダー格の天使と戦っていた。
誰がどう見てもジオウが圧倒している。だが、彼は何かのタイミングを伺っている様子。
「おっ二人とも周りを掃除してくれたみたいだね！よし！」
『ジオウ！』
『ジオウトリニティ！』
ジオウライドウォッチとジオウトリニティライドウォッチを起動させ、ジクウドライバーにセットする。
『ジオウ！』

ユナイトヒューザーと呼ばれるネジの部分を動かし、力を解放していく。
『ゲイツ！』
「よし、だいたいは倒し終ええええ!?」
ゲイツは空から降ってくる謎の光に包まれる。
『ウォズ！』
「我が魔王！そちらは大丈b・・・　おっと！」
ウォズも同じく謎の光に包まれた。
ジオウはジオウ、ゲイツ、ウォズの力を解放すると、ジクウドライバーを一回転させる。
『トリニティタイム！』『３つの力！仮面ライダージオウ！ゲイツ！ウォズ！トリニティ！トリニティ！」
光に包まれていたゲイツとウォズが腕時計の様な形に変形し、ジオウの両肩に装着される。
そのあとジオウの仮面が胸に移動し、『ライダー」の文字が三色になっているジオウトリニティの仮面が現れた。
三位一体の力。仮面ライダージオウトリニティに変身を完了するジオウ達。
「おい！ジオウ！なぜトリニティに変身した！お前一人でも対処できただろ！」

「久しぶりの戦闘だし、トリニティにもなっておこうかなって」
「実に我が魔王らしい」
トリニティに変身時の３人の意識はクロックオブザラウンドと呼ばれる空間に飛ばされている。
まだアナザーライダーの脅威があった頃はよくある光景だったが、平和になった現在これもまた久しぶりの感覚を味わっている３人。
ソウゴはもう少し話したい気分だったが敵を目の前にしているので、いったん話を終え、ジカンギレードで敵に襲い掛かった。
圧倒的な戦力差がより広がってしまったので、リーダー格の天使は防御も間に合わずにもろに攻撃を受けている。
「私にもやらせてくれ。我が魔王」
『ジカンデスピアー！ヤリスギ！』
主導権をもらったウォズは、ジカンデスピアー・ヤリモードで天使を突いていく。
「次は俺だ」
『ジカンサックス！Ｙｕ！Ｍｉ！』
ウォズから主導権を譲ってもらったゲイツは、ジカンサックス・ゆみモードで天使の鎧を撃ち抜いていく。

もうやめて！天使のライフはもうゼロよ！と言いたくなるほど天使はボロボロになっている。
『フィニッシュタイム！』
『ジオウ！ゲイツ！ウォズ！』
だが、そんな様子を気にせずに再び主導権を持ったソウゴはジオウライドウォッチのボタンを押し、トリニティライドウォッチのボタンを三回押して、ジクウドライバーを一回転する。
『トリニティ！タイムブレーク！バースト！エクスプロージョン！』
ボロボロの天使の背後にキューブ状の時計型エネルギーを設置し、敵に目掛けてピンクと黄緑の『キック』と黄色の『きっく』の文字型エネルギーが現れる。
ジオウトリニティは飛び上がり、エネルギーに沿って天使にキックを放つ。
それを受けた天使は背後のキューブ状のエネルギーにぶつかり、派手に爆発を起こした。
「よっしゃぁ！」
ジオウトリニティの変身を解き、生身のソウゴ、ゲイツ、ウォズに分かれる。
「大した強さではなかったな」
「そうだね。だけどあれがアナザーライダーでもなく、平成ライダーの怪人でもなかっ

たのが少し気がかりだね…」
「もしかしてタイムジャッカーが？」
　先ほどの天使はそこまでの強さではなかった。だが、未知なる敵が現れたというのは何か事件が起きているのではないか？と、思考するウォズ。
　とりあえずはクジゴジ堂に帰ろうとソウゴが提案し、３人は帰ろうとしたその時、懐かしい声がどこからか聞こえた。
「どうやらライダーが存在しない世界を何者かが時空の流れを変えたようだ」
「その声は」
「オーマジオウ…　！」
　オーマジオウ。２０６８年、最低最悪の魔王として恐れられていた時の王者。
　彼は未来の常磐ソウゴが変身した姿。黒と輝かしい金色が特徴だが、その姿はどこにも見当たらない。
　だが彼からはこちらの様子が見えているのか、なぜ声だけが聞こえるのか説明を始めた。
「そちらの世界は現在進行形である世界との融合が始まっている。それ故私がお前達に関与しようとすると世界の侵食がより進んでしまう。それを僅かでも軽減するため、声だけという形になったのだ」

「オーマジオウは時の王者。時空が不安定な世界に自身の力で関与すると少なからず影響を与えるんだ。ここに門矢士や海東大樹がいれば影響は与えないのだけどね」
「あの灰色のオーロラみたいなやつでやれば問題ないが、奴らがいない今では声だけが限界ってわけか」
「その通りだ」
　ソウゴがオーマジオウに質問する。
「その世界との融合が始まってるってどういうこと？」
「言葉通りだ若きの日の私よ。ある世界、『ストライクワールド』と呼ばれる世界との融合が始まっている」
「ストライクワールド？」
「簡単に言えば天使や悪魔を始め、魔法やドラゴンといった奇妙なものが存在する世界だ」
「天使ってさっき戦ったやつ？なるほど、あれはそのストライクワールドの住人だったんだね」
　続いてゲイツが質問する。
「で、その侵食を止めるにはどうしたらいい？早く止めなければ他にも湧いてくるんだろ」

「そうだ。侵食を止めるにはストライクワールドにて元凶を潰さなければならない」
「その元凶はわかってるのか？」
「生憎だが知らない。だが、仮面ライダーは一切関係ないということはわかっている。元はライダーと交差するはずがなかった世界だ。私が異世界のことまで知っていると思うな」
　それこそ通りすがりの奴らなら知っているかもしれないが、オーマジオウは言った。
「とにかくストライクワールドに行ってから原因を見つけよう。・・・　ってその世界にはどうやっていけばいいのかわからないのだけど」
　止めるのはいいが行き方がわからないではどうしようもない。
　そんなことは予想していたオーマジオウはソウゴ達の背後に次元の穴を開けた。
「私の力でお前達の世界の時間を止めておく。私が関与しても止めれば関係ないからな」
「さすがは我が魔王。その力添え感謝いたします」
「じゃあ二人とも行こう。ストライクワールドに！」
「おう」「ああ」
　ソウゴ達３人は、次元の穴へ入っていった。

―２０６８―

「ちゃんとストライクワールドに向かったか」

オーマジオウは若きの日の自分がストライクワールドに正しく辿り着けたか見届けていた。

「まさか私の力を継承した時間軸で、このような事が起こるとはな」

オーマジオウは驚いていた。まさか全く関係のない世界が侵略してくるという事態に。

「その時代の私自身で時間を破壊するのであれば問題ないが、別の者から破壊されるのは好ましくない」

「だから手助けしてやったが・・・　少し甘くなった気がするな」

世界が消滅する。

いくら時の王者である自分自身が消えないとはいえ、若きの日の自分が他人の手によって消えるのは良い気はしないのであろう。

「手助けはここまでだ。後は、若き日の私の問題。よい結果になることを期待してるぞ」

オーマジオウは何もない荒野で一人、ストライクワールドにいる3人を見ていた。

４つの紋章

「ここがオーマジオウの言っていたストライクワールドってところか」
「たしかに未来の我が魔王が言っていた通り、この世界はかなり時空が歪んでいるね」
「この世界に来たのはいいものの、一体ここからどうするんだ？ジオウ」
　オーマジオウの開けた次元の穴によってストライクワールドに到着したソウゴ達。
「お前達は誰だ!?この現象と関係あるのか!?」
　突然話しかけられ、驚くソウゴ。
　声の聞こえた先には紫の服に銀色のブーツを履いた金髪の羽の生えた女と同じく花が生えているピンク色の髪の女が立っていた。
　ソウゴは自分たちの世界で同じように羽の生えた戦士と闘っていたのですぐにこの世界の住人だと判断し、自己紹介をする。
「君たちがこの世界の住民だね？俺は常磐ソウゴ」
「おい、そんな易々と自分の正体を言ってもいいのか？奴はあの天使たちと同類だろ」
「とくにあの金髪のほうは私たちに敵意があるように見えるが」
　ルシファーとっては突然目の前にいた者が消え、そして自分の体が透け始める。そし

て、ソウゴ達の訪問。
　これらが連続して起こったらソウゴ達が原因だと思っても無理はない。
「貴様らは今起こったこの出来事に関係しているのかどうか聞いているのだ！」
「うーん関係しているのかどうかって言われたら・・・　関係しているのかな？ゲイツ、ウォズ？」
「おいその言い方は」「私たちを疑っている状態でその言い方は」
　ソウゴの返答にゲイツとウォズが注意しようとした。だが二人の言葉が言い終える前に金髪の髪の天使がが思いっきりソウゴに向かって殴りかかって来た。
　間一髪で避けた3人。そしてソウゴは今この時、ゲイツとウォズが言いたかったことを理解した。
「あちゃー・・・　たしかにさっきの言い方じゃ俺たちが黒幕みたいに見るね」
「当たり前だ！」
「これは一度戦って落ち着かせるしかないようだね」
「皆さん待ってください！」
　ジオウ組が変身しようとすると、ピンク髪の天使が待ったをかけた。
　だが金髪の天使ははその声に耳を持たずにソウゴを狙っている。
「お前はあの金髪の女の仲間なのか？」

「仲間と言えば・・・　仲間？」
「なんだその歯切れの悪い答えは」
「君達なら何が起こったのかは定かではないが、私たちを敵だと思わないのかい？」
「全く思ってないわけではありませんがあなた達の反応を見る限り、敵意がないように見えたので、話は聞いてみようと思いまして」
　その言葉を聞いた後、ゲイツがソウゴを襲っている天使に指を刺す。
「その割にはお前と一緒にいた奴はあんな風になっているが？」
「それは彼女も混乱しているからであって」
　ゲイツ達が話していると金髪の天使はソウゴに向かって炎を放つ。
　ソウゴは避けながらも必死に事情を話しているが天使は全く聞かない。このままでは相手を落ち着かせることができないと判断して、ジオウに変身した。
　放たれた炎を避け、ジカンギレード・ジュウモードで天使に向かって光弾を放っていく。
　天使はそれを華麗に避け、ジオウの足元から風を起こす。
　その風は台風の如く凄まじい威力で、離れているゲイツ達も飛ばされそうだ。
『アーマータイム！』『サイクロン！ジョーカー！ダブル！』
　ジオウはその攻撃に対してダブルアーマーを装着することによって、逆にその風を自

分のものにした。
「この台風を君に返すよ！」
天使は自分を囲むようにバリアを展開させるが、ダブルアーマーの『ライトサイクロン』によって威力が増加した風の勢いには耐えられず、ダメージは防いだが吹き飛ばされてしまう。
「だったら！」
天使は光の力を手に纏いジオウに殴りかかる。
ジオウはそれを見て別のライドウォッチを起動させて、アーマータイムする。
『アーマータイム！』『アギト！』
アギトアーマーを装着したジオウは同じように右手に力を溜める。
そして天使とジオウの拳と拳がぶつかった。
「ちっ！」
「ちょっとは俺たちの話も聞いてくれてもいいんじゃない？」
「だれが貴様らの話を聞くか！」
天使はジオウから離れ、自分の得意属性である闇の力を自分の周辺に大量に出現させ、ジオウに向かって放つ。
「ルシファー！落ち着いてください！ここでそれを放ったらここが崩れてしまいます

！」
「関係ない！これで奴を倒せるならそれで」
「だからこの方達は今起きている原因じゃないんですって！」
「だと言える証拠はどこだ！」
「それを今から話してくださるんです！」
　ピンク髪の天使が金髪の天使、ルシファーに必死に話を聞いてくれるように大声を出した。
　先ほどまで敵意剥き出しで闘っていたルシファーだったが、彼女の必死さは伝わり闇の力を収めた。
「お願いですから一度は落ち着いてください！ルシファー！」
「ちっ…」
　ルシファーの雰囲気でやっと話を聞いてくれると判断したジオウは変身を解除した。
「まずは我が魔王が誤解される発言をしてしまったことを謝罪するよ」
「ほんとうにごめん！君たちの心情を考えてなかった」
「このバカが悪かったな」
　ピンク髪の天使も謝罪する。
「こちらこそルシファーが襲いかかってしまって申し訳ございません」

「私はまだ貴様達を疑っているがな」
「ルシファー!」
戦いはやめたもののまだ敵意は隠し切れてないルシファー。
そんなルシファーに困りながら、ピンク髪の天使が自分の名を名乗る。
「私はビナーといいます。お互いの事情を話す前にまず場所を変えましょうか」

「… というわけです」
ビナーに連れてこられた場所で情報交換する一同。
ストライクワールド側で起きたこと、ジオウの世界で起きたこと。
それを聞いた一同は様々な感情を持った。
「ノイズがはいって消えた。アナザーライダーに歴史を奪われた時の現象とよく似ているね」
「ってことはアナザーライダーが?でもこの世界にアナザーライダーはいないんじゃ?」
「すみません、そのアナザーライダーというのは?」
「そっか。アナザーライダーについても話しておいたほうがいいかな」
アナザーライダー。

本来変身する資格が無い者が仮面ライダーの歴史を奪った『アナザーウォッチ』によって無理やり変身させられた怪人。

そのライダーが活躍していた時代にアナザーライダーが生まれれば、本来の仮面ライダーの存在が消え、偽りの歴史に生まれ変わる。

「なるほど。じゃああいつらは歴史が奪われて別のあいつらか生まれたわけか」

「の可能性が高いって話だけどね」

「アナザーウォッチにライダー以外の歴史暴れるのかどうかってところがわからないところだけど」

ゲイツが立ち上がる。

「これからの方針は決まったな。アナザーライダーいや、この世界にはちなんでアナザーストライクと名付けるか。そのアナザーストライクを倒す。いくぞ」

「行くってどこに？」

「外に出てみりゃ何かしら掴めるだろ」

ゲイツとソウゴ、ウォズはこの場から立ち去った。

「私たちも行きましょう。外にも何かしら異変が起きている可能性がありますし」

ビナーとルシファーもソウゴについていった。

「これは…」
「なんてこと…」
ビナーとルシファーは言葉を失った。
かつて広がっていた天使達の街は完全に跡形もなくなり、かわりに焼け野原になっている。
「そうだ！あいつらは！ウリエル達は！」
ルシファーは急いで意識を覚さない彼女達を保管していた場所へ向かう。
「ウリエルって？」
「簡単に言えば私たちの仲間です。ですが意識が戻らない状態が続いていますが」
ルシファーが顔色を変えて急いでこちらに飛んできた。
その様子からビナーは察した。
「ルシファー… その様子だと」
「あぁ。消えていた」
「アナザーストライクの障害か」
これも歴史改変の影響だろうと予想するゲイツ。
ソウゴもまた同じ考えだが、ウォズだけは少々異なっていた。
「たしかにアナザーストライクの影響だろう。しかしだとしたら気になる点がある」

「気になる点って？」
「ルシファーとビナー。この二人がなぜ存在ができているかという点だ。君たちは薄くなりながらも存在を維持できている」
「言われてみればたしかに…」
　ウォズは話を続ける
「君たちが存在を維持できているということは君たちの言っている仲間はなんとか存在はできているはずだ」
「意識がないのに逃げたってわけ？」
「さぁね。そこまでは知らないよ」
　ウォズが話し合えると、空を眩い光が照らし出した。
　思わず目を瞑る。その光が消え空を見上げると、そこには４つの光の紋章が浮かんでおり、その先にはどこかに繋がっているようだ。
「黄色と青、青単体に黄色単体のもの。そして紫の紋章だね」
「この色…　もしかしてあの方達の」
「四体のアナザーストライクはこの紋章の先にいるわけか」
「おっけー！じゃあ早速行こうか！」
　ソウゴとゲイツがタイムマジーンの呼び出しに試みようとするが、タイムマジーンは

現れなかった。
「あれ？出てこないね」
「我が魔王、おそらくここが異世界だからだね」
「だったら直接行くまでだ」
『ゲイツ！』『ゲイツリバイブ疾風！』
「そうだね」
『ジオウ！』『フォーゼ！』
『ライダータイム！』『リバイブ疾風！』
『アーマータイム！』『３２１！フォーゼ！』
「私も行かせてもらう」
　黄色と青の紋章に向かって飛び立とうとするジオウとゲイツにルシファーはついていこうとする。
　だが、ウォズがそれを止めた。
「いや君は行かないほうがいいだろう」
「なぜだ？」
「気付いているだろう？君が最初に出会った時よりもより薄くなっているのを」
　そう、ウォズの言う通りルシファーは最初に出会った時よりもより薄くなっている。

だがそれに比べてビナーの薄さは変わっていない。
「君が自分の力を使うと存在を維持している力が薄くなる。ここはここに残って我が魔王達の帰りを待つとしよう」
「私は・・・ ウリエル達もこの世界も自分の力で助けられないのかっ」
「いや救えるさ」
ジオウに変身したソウゴが言う。
「この異変が戻ればルシファーの存在も確実なものになる。そしてこの異変を止められるのは俺たちしかいない。ウオズと一緒にここで待ってて」
「というわけだ。大人しく待ってろ天使」
ジオウとゲイツが同時に飛び立つ。
そして黄色と青の紋章の中は入っていった。

王国の英雄

「アーサー王！万歳！」

アーサー王。彼女は悪の手から国を守った英雄。

復興した国で今、アーサー王を称える祭典が行われていた。

国の民は皆アーサー王に尊敬の目を向けている。彼女もまたそのような目線を向けられ悪い気はしない。これが自分が守った物だとわかるからだ。

ここにいる人々の誰もが思っていただろう。このような平和は未来永劫続くと。

だが、そんな未来は来ることは無かった。

「アーサー。君の力、歴史を利用させてもらうね」

ここは町外れの住宅街。住人たちはアーサー王を人目見るために出かけている。そんな人気のない場所に黒いコートに深く黒いハットを被った人物がポツンと一人立っていた。

深く被っているため顔は見えず、服装によるためなのか体型もあまりはっきり分からず、性別は判断できない。

その者の手にはブランクウォッチ。これは固有の能力や機能を持たない空のウォッ

チ。
このウォッチには2つの使い道があり、1つはジオウやゲイツが行っていた『過去の平成ライダー達に渡し、あるタイミングでライドウォッチ化したものを受け取る』ということ。
そしてもう1つがタイムジャッカーが行っていた『平成ライダーの力を強引に奪い取り本来ライダーになる未来がない、変身資格がない人物に力を奪ったウォッチ、『アナザーウォッチ』を導入する』ということ。
今回、この人物がやろうとしていることは後者の方である。
すなわち、アーサー王の力を奪い取るつもりだ。
「さて、私もアーサーのいる場所へ移動するとしよ～と」
黒いハットの人物は姿が一瞬で消え、アーサー王の祭典があっている場所へワープした。
ワープしたあと右手を前に突き出す。すると世界の時が一瞬にして停止した。
停止した世界を一人で歩く。そしてアーサー王の間近までたどり着く。
そして左手にブランクウォッチを持ち、停止しているアーサー王の胸にブランクウォッチをかざし、上部のボタンを押す。
「っ!?」

力を吸い取られる感覚を感じたのだろう。ほんの一瞬だけ、アーサー王が動くが再び停止した。

力を完全にブランクウォッチに吸い終わると、ブランクウォッチは変化し始めた。

『アーサー…』

アーサー王の力と歴史を奪ったウォッチ、『アナザーアーサーウォッチ』が誕生してしまった。

アナザーアーサーウォッチの側面には、アーサー王の面影はあるが歯は剥き出しになり、目はまるで鋭く尖ったラピスラズリの様な形になっているアナザーストライクがうつっている。

「これで４つのアナザーウォッチが生まれた。残すのはあと彼女だけど…　４つあるし先にこいつを使った方が楽かも」

黒ハットの人物は４つのアナザーウォッチを起動させるため、とある場所へワープした。

青と黄色の紋章の先へ空を飛ぶことでたどり着いたジオウとゲイツは、紋章の先にあった世界の陸地に降り立つ。

フォーゼアーマーを解除し、ノーマル状態のジオウに戻る。

「これは・・・　酷い状態だね」
「まるで俺がいた２０６８年のようだ」
　二人が降りた地は荒れ果てた荒野。砂埃が常時起きており、変身を解かない方が身のためだ。
　何か無いか荒野を見渡す。現在の状態で見える範囲ではなにもなかった。
　より遠くが見えるようにするには！とジオウはオーズライドウォッチを起動させ、ジクウドライバーに装填する。
『アーマータイム！』『タカ！トラ！バッタ！オーズ！』
　オーズアーマーの顔『オーズヘッドギアＭ』にある『タカインジケーションアイ』には最大で８ｋｍ先の人物の識別ができ、遠目が利く姿となっている。
　その状態で再び周りを見渡すと、離れた場所にテントのようなものが建っているのを目視したジオウ。
　それをゲイツに伝え、そこに向かうことになる。
　空を飛んでその場所に向かおうするが飛行状態があまりに不安定なため、空を飛ぶのは諦めた。
　どうやら原因は、砂埃がゲイツリバイブ疾風が飛行する際に使用する装備、リバイブストリーマーに入り込んでくるからのようだ。

フォーゼアーマーも砂埃が影響して安定して飛べないため、ライドウォッチホルダーからバイクライドウォッチを取り出し、アクティブプッシュを押し、ライドストライカーに変形させる。

二人はそれぞれ変形させたそれに乗り発進する。

走ること数分。目的地近くに到着した二人は、変身を解除した。

ライダーの姿のままだと敵か何かと間違えられてしまう可能性を考慮したからだ。

「道中と比べここは砂埃が起きていないようだな」

ゲイツの言う通り、ここより少し離れると砂埃が起きているが、テントが建っている周辺は不思議と発生していなかった。

「そうだね。おっ良かった人も居た！どうしてこうなったのか何か知ってるかも」

アナザーストライクか影響しているのはわかっているが、そのアナザーストライクがどんな姿なのか、どんな能力を持っているのかはわかっていない。

ソウゴがテントから出てきた老人に話しかけると、老人はソウゴ達を見て少し驚いた表情をした。

「あなた達は先ほどまでいた旅人のお連れさんですかな？」

「旅人？いや俺たちはそんな人は知らないけど・・・ ゲイツは？」

「一緒に行動している時点でお前が知らなければ俺も知るわけがなかろう」

「そうでしたか。先程まで旅の方と雰囲気があまりに似ていたもので・・・」
「雰囲気?」
旅人が自分たちと雰囲気が似ていた。もしかしたら自分たちと同じように外から来た人物ではないかと疑うソウゴ。
ソウゴが次の質問をしようとすると横入りするようにゲイツが老人にそのことについて聞いた。
「どんなやつだったか、ですか。身長が高い男ということしかわかりません。あっそういえば奇妙なものを持っていました」
「奇妙なものってどんな形だ?」
「確か四角い箱だったような。私が老人な故、記憶力が乏しいのは許してくだされ」
「ほかにこういうものは持っていなかったか?」
ゲイツがライドウォッチを老人に見せる。
だが、老人は見たことないと答えた。
ほかにその旅人について知っている人物はいないか老人に聞くが、その旅人を見たものは自分だけと言った。
それを不思議に思ったソウゴとゲイツだったが、外には今ここにいる3人を除けば誰もいないこと、そしてテントが1つしかないことを見て納得した。

「ねえおじいさん。その旅人はどこにいったの？」
先程までいたと言うなら近くにいるはず。そう考えたソウゴだが、老人は不可解なことを言った。
「それがいつのまにかいなくなっていたのです」
「いつの間にかって…」
この老人の発言で自分たちより早く来ていた人物は、少なからず能力か何かを持っている、もしかしたらナザーストライクに何かしら関係している可能性が高いとわかった。
ソウゴは老人にお礼を言うとゲイツと一緒にテントから老人か見えない距離まで離れようとした時、空から光が降ってきた。
なんとか老人と一緒に避けたつもりだったが、老人の方は背中に火傷のような傷を負ってしまった。
急いで老人をテントの中に入れようとするが、空から降りてくる人型の何かによってできなかった。
人型の何かの全身を見ると、歯ひ剥き出しになっており、金髪で目は尖ったラピスラズリのように青く尖っている。
そして、鎧を纏っており、どこかの騎士のような姿をしているが騎士の勇姿さは感じ

られず、不気味で歪んだ姿形をしている。
　まるでアナザーライダーのようだ。
「やつがアナザーストライクと見て間違いないようだな」
「そうだね。もしかしてこんな荒野になって人がいないのもこいつがやったのかな」
「そうみて間違い無いだろう。現に今この老人を殺そうとしていたしな」
　ソウゴはアナザーストライクに話しかけるが、何も返事は返ってこない。意識がないのかと一瞬考えたが、溢れ出る殺意から話し合いはする気はない、又はできないと判断した二人。
　ソウゴはジオウーライドウォッチを、ゲイツはゲイツライドウォッチとウィザードライドウォッチを起動させ、ジクウドライバーに装填する。
「「変身！」」
『ライダータイム！」「仮面ライダー！ライダー！ジオウ、ジオウ、ジオウーー！』
『アーマータイム！』『プリーズ！ウィザード！』
　二人が変身したのを確認するとアナザーストライクは二人に襲いかかってきた。
　ジオウーーがサイキョーギレードで相手の剣による攻撃を防ぐ。サイキョーギレードで相手の剣を弾き、空いている腹あたりを素早く横薙ぎする。
　剣と鎧が交わり、キーンと金属の音が周りに鳴り響く。どうやら生半可な攻撃では鎧

の防御は突破できないようだ。
ジオウ１１とアナザーストライクはお互いに離れると、アナザーストライクに向かって等身大の火球が飛んでいった。
アナザーストライクは素早く、己の持つ剣でそれをさばく。
すると、それと同時にジオウ１１が両手で持ったジカンギレードと合体させたサイキョージカンギレードで、思いっきりアナザーストライクに向かって振り回した。
どうやら有効な攻撃だったようだ。
「おいジオウ、奴は防御力が高い。一気により大きい火力で押すぞ」
「俺もちょうど思っていたところだよ！」
『フィニッシュタイム！』『ウィザード！』
『ジオウサイキョー！』
ゲイツはジクウドライバーにセットしている２つのライドウォッチのボタンを押し、ドライバーを一回転させた。
それと同時にジオウ１１はジオウの顔を模したギレードキャリバーの表記を『ジオウサイキョー』に変化させ、刃の先を上に向けるとエネルギー体によって刃が巨大化する。
それの側面には『ジオウサイキョー』と書かれている。
『ストライク！』『タイムバースト！』

アナザーストライクの頭上に5つの赤い魔法陣が浮かび上がり、そこから火球が降り注ぐ。
そしてジオウ－1がサイキョージカンギレードを横薙ぎにし、アナザーストライクは大きな爆発を起こした。
爆発によって舞った砂煙が空けると、アナザーストライクがいた場所には、大きさはジオウの腰の部分ぐらいで、緑色の球体が落ちていた。
「なんか大きいボールが落ちてるけど」
「罠かも知れん。様子を見るぞ」
様子を見ていると、球体は地面から少し浮き、淡い光を放ち出した。
そこから何かしら攻撃か何かされても対処できるように構えると、球体はこの場から姿を消した。
「消えた・・・！」
「一体なんだったんだあれは」
歪んだ騎士のアナザーストライクを倒した後に現れた謎の球体。あれは必ず今回の件に関わっているのは状況から見て想像に難しくない。だが、どこにいったのか見当もつかないうえ、老人の手当もしないといけないため、この場で考えることはやめた。

『フィニッシュタイム！』『ウィザード！』
『ジオウサイキョー！』
『ストライク！』『タイムバースト！』
二人の攻撃を受け、倒された騎士のアナザーストライク。
ジオウ達は気付いていなかったが、実はその時、何者かが時を止めていた。
「情報通りジオウの戦闘能力は飛び抜けている。アナザーアーサーでは相手にならなかったか～」
そんな独り言を言っているのは、黒いコートに深く黒いハットを被った人物。アーサーから歴史を奪い取った張本人だ。
黒いコートに深く黒いハット・・・ と何度もくどいので、勝手に「ブラックコート」と呼ばせてもらう。
「このままいくと残る三体も簡単に倒されてしまうと思うけど・・・ ちょっと早めに行動しないといけなくなるけどまあ間に合うかな」
ブラックコートは爆発が止まっている場所まで歩く。そこには何かが倒れていた。
その何かにブラックコートが触れると光を放ちながら変形していき、緑色の球体が出来上がった。
「あと3人が倒される前にあれを終わらせなきゃ。じゃあねジオウとゲイツさん。時が

止まってるから聞こえないと思うけど」
ブラックコートはその場から姿を消すと、再び時間が動き出した。

ジオウ達がアナザーアーサーの世界に向かう前にオーマジオウによって時が止められたジオウの世界である男が歩いていた。
「誰だか知らんが全くめんどうなことをしやがる・・・」
なぜ時が止まった世界で動けているか定かではないが、男は近くに建っている家の扉を開ける。
その扉の先は家の内部に繋がっておらず、そのかわりに荒野が広がっていた。
「あいつらの手助けをしてやるか」
男は荒野に足を踏み入れた。

青の紋章

「緑色の球体?」

ソウゴとゲイツは起きた出来事を話すために一度、ウォズ達のもとへ帰還した。

アナザーアーサーがいたこと、世界は荒れていたこと。そしてアナザーアーサーを倒した後に現れた謎の球体のこと。

球体についてこの世界の住人であるルシファーやビナーに聞くが、残念ながら二人ともそれについて何も知らなかった。

何かしら裏で動いているのでは無いか?と考えるゲイツ。だが、正確な情報がない状態で、紋章の世界の時空の歪みを直さないというわけにはいかない。

今はとりあえず有力な情報が手に入るまでは紋章の世界を攻略することに決まった。

「俺たちのほうはこんな感じだけど、ウォズ達のほうはなにかあった?」

「私たちにってよりも私にしか気づかない違和感はあったね」

「なんだそれは?」

ウォズにしか気づかない異変。外の世界の住民しか気づかない異変と聞き、ルシファーが言葉の続きを早くいうように急かした。

「何者かがジクウドライバーを奪い取った、かもしれない」
「ジクウドライバー？」
　ジクウドライバーがわからないルシファーにソウゴが捕捉する。
「俺たちが変身する際に使うベルトのことだよ」
「そのジクウドライバーとやらがなぜ奪われたとわかるのだ？」
　お前はここにいたはず。とルシファーが言う。
　するとウォズはこう言った。
「もともと私は歴史の管理者、クォーツァーという組織に所属していてね。そのジクウドライバーはクォーツァーが多く持っていたんだ」
「なるほど。じゃあら今回の件は盗難された際にお前がわかるように仕込んでいたということか？」
「そう考えてもらって構わない」
「便利だな」
　盗まれただけではなく、誰が盗んだまでわかってほしいものだが。
　そんなこといってもしょうがないので、ソウゴとゲイツは再び変身して次の紋章へ向かった。

ソウゴ達が来る前にすでに青の紋章の世界に来ている人物がいた。
「この世界のことはだいたいわかった」
マゼンタのカメラを首にかけ、高身長な男。
彼は周辺をカメラで撮っている。
「以前もこういうせかいには来たことあるが、やはりライダーのいない世界には違和感を感じるな」
男は次の紋章の世界に行くため灰色のオーロラを出現させようとする。
たが男はその時、背後に妙な視線を感じ、後ろを振り向く。
そこにはアナザーストライクを生んだブラックハットとボロボロの羽衣を纏い全身が青く生々しい姿をしている化け物が立っていた。
「君、外からの人間だよね？」
「そういうお前もこの世界の住人じゃなさそうだが？」
お互いは目線を交差する。たったそのわずかな会話だけでお互いに利害が一致しない敵ということを理解した。
ブラックハット（仮）は横にいた怪物にここから消えるように命じ、男と二人っきりになった。
そしてブラックハット（仮）はどこからかあるものを取り出した。

「それは、ジオウが使っていた・・・」
「ジクウドライバー。悪いけど君にはここで死んでもらうよ。ここで逃すと後々障害になりそうだがらね」
　ジクウドライバーを装着し、アナザーウォッチを起動させる。
『パンドラァ・・・』
　ジクウドライバーに装填し、一回転させると、従来のパンドラに似ているが、どこか歪な姿に変化した。
「しょうがない。無用な戦いは避けたかったが・・・」
　男はマゼンタのバックルを装着し、腰にある白い箱のようなものから一枚のカードを取り出した。
　それをマゼンタのバックルに装填する。
ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ
　男はいくつもの世界を旅し、世界を繋いでいった破壊者、ディケイドに変身した。
「へぇ。君も仮面ライダーなんだ。ピンクってめずらしいね」
「ピンクじゃない、『マゼンタ』だ。覚えておけ」
　ライドブッカーを剣にし、アナザーパンドラ（変身態）に斬りかかる。
　アナザーパンドラは左腕でそれを防ぎ、右手に持っていた絶望くんでディケイドの腹

に光弾を打ち込む。
ノックバックするディケイド。アナザーパンドラは続けてポケットから取り出した箱を開ける。
すると、箱から無数の黒い手がディケイドを目掛けて襲い掛かった。
「気色悪い攻撃をしてくるんだな」
バックルにカードを装填し、ライドブッカーを銃にする。
『アタックライド･ブラスト』により強化されたライドブッカーから放たれる光弾は箱から出てくる黒い手を次々と破壊する。
この攻撃を防がれたアナザーパンドラは驚いていた。
「まさかこれを防げる奴がいるなんてね。これってどんな攻撃を効かない冥界へ誘う手だったんだけど」
「生憎と俺は破壊者なんでな」
必殺技を完璧に防がれたアナザーパンドラは、今の戦闘力では到底目の前にいるマゼンタの戦士には勝てないと理解した。
「どうやらここで君を倒すのは無理そうだ。引かせてもらうよ」
ディケイドがそうはさせまいと攻撃を仕掛けて来るが、アナザーパンドラは時を止め、この場から退避した。

「なっ!?消えただと・・・　いや。奴もタイムジャッカーのように時を止めてこの場から立ち去ったのか?」
　周りに敵がいないことを確認して変身を解除する。
　男・・・　門矢士は再度灰色のオーロラを出現させる。
「そろそろ時止めに対して対策しておかないと面倒だ」
　そんな独り言を残し、灰色のオーロラの中へ入って行った。

　門矢士が立ち去った後、遅れてジオウとゲイツも青の紋章の世界にたどり着く。
　前の世界と同様に地面は荒れ果てているが、砂嵐は舞っていない。
　この世界もまたアナザーストライクによって破壊されたのだと、判断する二人。
　周りを見渡していると、ジオウが少し遠くに青く光っている何があるのを見つけ、ゲイツに報告する。
　二人はそこに向かうと、羽を模した青の光が人型に姿を変えていく。
　そしてボロボロの羽衣に生々しい姿に変化した。
「アナザーストライクか」
『ゲイツリバイブ疾風!』
「さっさと片付けよう、ゲイツ」

『ジオウｌｌ！』

ジクウドライバーのＤ，３スロットにセットしていたライドウォッチを外し、新たなライドウォッチを装填し、一回転させる。

『リバイブ疾風！』

『ジオウ！ジオウ！ジオウ！ツー！』

「いくぞ！」

ジオウｌｌ＆ａｍｐ；ゲイツｖｓ青のアナザーストライク。

戦いの幕が開けた。

偽の救世主と厄災

ジオウがサイキョージカンギレードで攻撃・防御をしながら、ゲイツの素早さでアナザーノアにダメージを与えていく。

アナザーノアはボロボロの羽衣でゲイツを捕らえようとするが、その前にジオウによって羽衣が切られていく。

アナザーアーサー同様、早期に決着が付くかと思われたが、ここでこの場にいる者以外による攻撃がジオウに向かって飛んできた。

不意打ちだったため、受け身が取れずもろにうけてしまったジオウ。

ゲイツは一度アナザーノアへの攻撃を中断しジオウの元に寄ると、アナザーノアの隣の空間がねじ曲がり、そこから紫のドレスに金髪の美女が現れた。

戦いの場に似合わない彼女が現れたため二人は困惑する。しかしその困惑はすぐに消え去ることになる。

「君はそのアナザーストライクを生み出している人?」

ジオウの問いかけに口頭での返答はしないが、かわりにといった様に謎の美女は手に持っていた箱の蓋を開けた。

すると彼女から人の顔な形をした青いオーラが無数に現れ始める。そして世界中の男を虜にしてしまうことも可能であった美しい顔が、一瞬にしてアナザーライダーの様な歪んだ醜い顔に変化した。

「なるほど。お前もアナザーストライクだったというわけだ」

綺麗な顔に見惚れてしまっていた二人だったが、その正体がアナザーストライクだと分かるとすぐに心を戦闘モードに切り替える。

「ジオウ、お前はあの紫の方をやれ」

「わかった。ゲイツはあの青い方の攻撃が俺に向かってこない様にしてね」

「当たり前だ」

ゲイツはアナザーノアと空中で戦闘を開始すると、地上に残されたジオウと紫のアナザーストライク… 今の彼ら二人は知らないが、パンドラを模したアナザーパンドラはお互いに睨み続ける。

一度不意打ちを決められているため、警戒するジオウだがこのままでは一向に戦闘が開始しないと判断し、ジオウ1の能力を使い数秒後の敵の動きを見た後、サイキョージカンギレードで斬りかかる。

アナザーパンドラはジオウの攻撃を華麗に避けるが、未来を見たジオウは避けられることがわかっていたので、サイキョージカンギレードに装着している『ギレードキャリ

バー』のスイッチを操作し、『ライダー』から『ジオウサイキョー』に表示を変える。
『サイキョー!フィニッシュタイム!』
アナザーパンドラが足をつける地面に向かって、サイキョージカンギレードの光り輝く刀を刺す。
アナザーパンドラはそれを避けようと試みるが、ジオウはすぐに剣を振り上げた。
「ギャァァァァァァァ!!!!!」
アナザーパンドラは悲鳴を上げ爆発した。が、すぐさま爆発が時の逆再生を始めた。
ジオウは爆発の時が戻っていく現象に驚いている。
そして何事もなかったかのように、アナザーパンドラがそこに立っていた。
「ギィィィィィィ!!」
「時を戻せる力があるのか…　それとも命が数個あるのか…」
なぜ生き返ったのか考察していると、ジオウはアナザーパンドラから何かが抜けていくのに気がついた。
「あれは箱を開けたときに出てたエネルギー…　もしかしたらあれを使い生き返った?」
ジオウの言う通りアナザーパンドラは自身に溜められている厄災を消費することによって時を戻し、蘇ったのである。

ジオウ１にはマゼンタリーマジェスティと呼ばれる特殊フィールドを展開することによってアナザーライダー及びアナザーストライクを倒すことができる力がある。
よってアナザーパンドラには攻撃が効いていないわけではない。
しかし生き返るのをどう対処するか。そこが問題である。
「だったらそのエネルギーを無くさせる！」
アナザーパンドラか放った光弾を避けつつ、グランドシオウライドウォッチを起動させ、ジオウライドウォッチとともにジクウドライバーセットする。
ベルトを待機状態にさせると歴代２０平成ライダーを象徴する音声が待機音として流れ出すと、ジオウの背後に巨大な黄金の時計台と歴代平成２０ライダーの石像が現れる。
その石像の表面が剥がれ、平成２０ライダーの姿を見せるとドライバーを一回転させる。
『グランドタイム！』
『祝え！仮面ライダー！グランドジオウ！』
背後にあった２０ライダーが黄金のフレームに取り込まれ、それらが小さくなりジオウの胸、肩、腕、足に装着される。
最後に顔に『ライダー』の文字が装着され、平成２０ライダーの力が全てを所持する

黄金のライダー、仮面ライダーグランドジオウに変身完了した。
グランドジオウは右肩のクウガのレリーフに触れる。
『クウガ!』

―２０００年―

ゴ・ガドル・バとの一騎討ち。アメイジングマイティに変化したクウガはキックを放つためジャンプするゴ・ガドル・バに向かって同じくキックを放った

「おりゃぁぁぁあ!」
黄金のフレームがグランドジオウの頭上に現れ、そこからゴ・ガドル・バに向かって放ったキック中のクウガが出現した。
そのままの状態でアナザーパンドラに直撃し、アナザーパンドラは爆発する。
だがまたもアナザーパンドラの時が巻き戻され蘇る。
アナザーパンドラからエネルギーが抜けていくのを確認した後、グランドジオウは右足にあるファイズのレリーフに触れる。
『ファイズ!』
「てやぁ!」

再度グランドジオウの頭上に黄金のフレームが現れ、そこから２００３年のファイズが出現した。
ファイズの右足のポインターから敵を拘束するフォトンブラットがアナザーパンドラに突き刺さり、それに飛び込むように飛び蹴りをする。
粒子化してすり抜けた後再度ファイズに戻り、アナザーパンドラにはφのマークが刻まれ爆発した。
だがエネルギーはまだあるようで時を戻し復活しようするアナザーパンドラ。
グランドジオウは左足にあるドライブのレリーフと胸にあるビルドのレリーフに触れると、グランドジオウの右横に黄金のフレームが現れ、そこから仮面ライダードライブタイプトライドロンが出現する。
さらにビルドのレリーフからフルバトルバスターが出現した。
三度目の復活をしたばかりのアナザーパンドラに向かって、二人のライダーは技を放つ。
『ヒッサツ・フルスロットル！』『スピード！ビック大砲！』
『フルフルマッチデース！』『フルフルマッチブレイク！』
トライドロンと戦車を模した巨大なエネルギー弾がアナザーパンドラに直撃する。
もちろん２つの同時攻撃に耐えることはできず、またも爆発する。

　また復活すると次なる攻撃の準備をしようとするが、再生のスピードが先ほどより大幅に遅くなっていることに気づく。
「もしかして、エネルギーが尽きかけている?」
　ご名答である。再生には大量のエネルギーを消費するがそれを短時間で3回もさせられたアナザーパンドラはもう復活できるのは残り一回となっていた。
　なんとか復活したアナザーパンドラ。だが彼女の前にはグランドジオウと4つの黄金のフレームがあった。
　グランドジオウはアナザーパンドラが復活するタイミングと同時に、ジオウライドウォッチとグランドジオウライドウォッチのボタンを押し一回転させ、必殺技を発動していた。
『オールトゥエンティタイムブレーク!』
　4つの黄金のフレームの右から『オーズタジャドルコンボ』『フォーゼステイツスタイル』『ウィザードインフィニティスタイル』『鎧武オレンジアームズ』が出現し、右のオーズから連続して攻撃を始める。
「せいやー!!!」
「ライダーロケットドリルキック!!!」
「はぁぁぁ!!!」

「せいはー!!!」
そしてグランドジオウが飛び上がり、右足に平成２０ライダーのエネルギーを溜め、アナザーパンドラに叩き込んだ。
アナザーパンドラはこれまでで一番大きな爆発と共に完全に消滅した。
『フィニッシュタイム!』
『カブト!ザックリカッティング!』
一方ゲイツもカブトライドウォッチの力でクロックアップを発動し、パワーがある剛烈に姿を変えアナザーノアを倒していた。
「やったね」「ああ」
アナザーストライクを二体も倒し、後はこの世界を去るだけ。
だがジオウが上空に青と赤の球型のエネルギー体が飛んでいるのを目撃する。
「あれって…　あの時も」
「なんだジオウ?もう帰るぞ」
「あ、うん」
あとでこのことをみんなに話そうとそう思ったジオウだった。
「予想外に力が溜まるのが早いなぁ!」

ブラックハット（仮）は指を鳴らす。すると目の前に四体目のアナザーストライクが現れる。
「もうさっさと最後のこいつを倒してもらって力をもらおうっと」
アナザーストライクをある場所に送ると、ブラックハットは愉快そうに鼻歌を歌い出した。

叡智の魔術王

ジオウとゲイツが青の紋章の世界でアナザーノアとアナザーパンドラを撃破した頃。
居残り組のウォズ、ルシファー、ビナーは、彼らの帰りを待っていた。
「我が魔王とゲイツ君が青の紋章をクリアすれば残りは2つ。ストライクワールドの時空は徐々に戻っていくはずだが、君たちは以前よりさらに薄くなっているじゃないか」
ウォズの言葉にビナーは自分がより薄くなっていることに気付いて驚いた。
だが、ルシファーは自身がもう存在が消えかけているのはわかっていた。
「お前の連れが一体目のアナザーストライクを倒した際、私から力が抜けていく感覚があった。これが自然現象なのか倒した事による影響なのか。もし後者であるならば別の方法を考えるしかなくなるな」
「別の方法なんて何かあるんですか?ルシファー」
「知らん」
「知らないのにそんなこと言ったのですか!?」
「そんなもの時間に詳しいお前らに何か案を出してもらうしかない」
「そうだね。残された君たちストライクワールドの住人より私たち外部の人間の方が何

かしら出てくるかもしれない。だけど…」
ウォズが言葉を続けようとした時、空に浮かぶ黄色の紋章が眩い光を放ち始めた。
それはすぐにおさまり、何が起こってないか周辺を警戒すると大きな揺れがウォズ達を襲った。
わずかな間だったが、逆にそれがわずかな時間しか起きていないことで何が起こったのか大体予想ができた。
「どうやらあちらから攻めてきたようだね…　君たちは戦力にはなれそうに無いみたいだからどこかで隠れてもらうと助かるんだが」
「全く戦闘に参加できていないことが悔しいが、お前の言う通りどこかに隠れさせてもらう。もしかしたら何かしら力を取り戻すヒントが見つかるかもしれないからな」
「ではウォズさん。ご武運を」
ウォズはマフラーを全身に纏い、荒れ果てた町に向かって行った。

震源地に着いたウォズ。
荒れ果てた町を探索しなければならないかと思われていたが、先ほどの揺れを起こした原因はすぐに見つかった。
「なるほど。これがアナザーストライクというものか」

アナザーアーサーと同様に聖騎士の様な姿をしているが、従来の聖騎士達が放つ聖のオーラが全く感じない。むしろ逆に魔のオーラが具現化するほど現れている。魔の手に堕ちた聖騎士というところか。

ウォズは知らないが彼が見つけたアナザーストライクは残す最後の一体の『アナザーソロモン』である。

予め腰に装着していたビヨンドライバーにスイッチを押し起動させた『ギンガミライドウォッチ』をセットし、変身待機状態になる。

鳴り響く待機音にこの時初めてウォズの存在に気がついたアナザーソロモン。

「変身」

『投影!ファイナリータイム!』『ギンギンギラギラギャラクシー!宇宙の彼方のファンタジー!ウォズギンガファイナリー!ファイナリー!』

「この世界では初めての戦闘・・・ 君の実力がわからない以上、最初から全力でいかせてもらうよ」

お互いがおたがいに攻撃を仕掛ける。アナザーソロモンは剣を使わず、格闘戦が始まった。

ウォズはアナザーソロモンの攻撃を的確に見極め、隙を狙っては殴りダメージを与える。

ノックバックしたアナザーソロモン。右手を前に突き出すとウォズの足元から台風が起きた。
だが、宇宙空間は無風である。その宇宙の力を所有するギンガファイナリーは台風をすぐに消し去った。
ウォズは空中に浮遊したまま、アナザーソロモンを真似するかのように右手を前に突き出す。
するとアナザーソロモンの上空に、無数の隕石が現れ降り注いだ。
地に降り立ち、追撃を加えようと宇宙エネルギーの圧縮したものをアナザーソロモンに向けて放ったが、そこにアナザーソロモンの姿はなかった。
姿を消したのか、高速で動いているのか。どちらにも対応できるようにワクセイフォームにチェンジしようと、ドライバーにセットしているウォッチを外した瞬間、背後から攻撃を受けてしまった。
そのはずみにウォッチを落としてしまい、すぐに拾おうとするが、先にアナザーソロモンに拾われてしまう。
「しまった!」
続けてアナザーソロモンはウォッチの力をコピーし、自身の剣にその力を纏わせる。
ウォズはアナザーソロモンからウォッチを取り返そうと試みるが、不意打ちとウォッ

チが取られてしまった同様から、先ほどまでの戦闘ができていない。
反対攻勢に出たアナザーソロモンは、ウォズが殴りかかってきたらそれを避け、宇宙のパワーを纏った剣でウォズを斬り裂き、蹴りの体制を確認したらバリアを展開しカウンターの一撃を放つ。
ウォズはなんとか変身解除される前に、『シノビミライドウォッチ』をセットして『フューチャリングシノビ』姿を変える事に成功したが、自身が不利なのは変わらなかった。
「フューチャリングシノビではあのギンガの力には太刀打ちできない。ここは我が魔王の帰還を待ち、一時撤退をするしかなさそうだ…」
フューチャリングシノビの力でこの場から去ろうとしたが、それはされなかった。
目の前にいるアナザーソロモンがダメージを受けていたのだ。ウォズは自身の攻撃によってではないと一瞬で理解する。
彼はジオウ達が救援に来たと思っていたが、攻撃の主はジオウ達ではなかった。
「化け物がいたから倒そうと思ったが… まさかお前がいるとはな」
「なっ!?… まさか君までこの世界に来ているとは予想していなかったよ」
攻撃の主は銃の形をしたライドブッカーを構えるディケイドだった。

「見た感じ苦戦しているようだな。手を貸してやる」
「助かるよ門矢士」
　世界の破壊者、仮面ライダーディケイドとの共闘が始まった。
　ウォズがシノビの力でアナザーソロモンの視界を遮り、ディケイドがライドブッカーで斬り裂く。
　アナザーソロモンはすぐさま自分自身の力とギンガの力を使い、全てを燃やし尽くす太陽のエネルギーを両手に溜め、二人に放った。
　アタックライド・インビジブルと忍法でアナザーソロモンの近くに瞬間移動し、攻撃を避けつつダメージを与えた。
　二人のコンビネーションに対応できず、一度距離を取るアナザーソロモン。
「私のウォッチがやつに取られてしまってね。面倒になっていたんだ」
「ふん、ウォッチを取られるとはお前、案外抜けてる所あるんだな」
「完璧な人間より、これぐらい抜けてる方が親しみやすくていいだろう？」
「俺はお前と仲良くなるつもりはない」
「それは私もだ」
　少々雑談を挟んだ後、ギンガの力によって降り注ぐ隕石を走って避ける二人。
「全くその奪われたウォッチが面倒だ。さっさとあいつに返させるか」

ライドブッカーから一枚のカードを取り出し、バックルに装填する。
ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＦＯＲＺＥ
コズミックパワーを持つライダー、仮面ライダーフォーゼにカメンライドするディケイド。
背中のジェットパックを利用して敵に近づく。さらに右手にロケットモジュールを装備し、アナザーソロモン向かってロケットパンチを放つ。
ロケットモジュールを解除し、肉体戦を仕掛ける。
殴る、膝蹴り、頭突きとオリジナルのフォーゼさながらの戦闘スタイルをするディケイドフォーゼ。
風の魔法を使いディケイドから離れたアナザーソロモンは、剣にギンガミライドウォッチを剣に強制的にセットし、全身にあるギンガの力も剣に纏わせ、二人まとめて消滅させようとする。
『忍法！時間縛りの術！』
忍法を使い背後に回っていたウォズがアナザーソロモンを時間縛りの術で動きを停止させる。
ギンガの力があれば時間縛りの術は効果がなかったが、残念ながら先ほどまで全身に流れていたギンガの力は、全て剣に移行させてしまったため、術を受けてしまったよう

だ。

ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　Ｄ，Ｄ，Ｄ，ＤＥＣＡＤＥ

アナザーソロモン目掛けてカード状のエネルギーが現れ、それを次々と通過して飛び蹴りをするディケイド。

ディケイドの能力によって、アナザーソロモンは撃破された。

爆発が起きた場所には黄色の球体とギンガミライドウォッチが落ちていた。球体は光を放ち形を消した。

これがソウゴが言っていた物と理解したウォズはウォッチを拾い、お互いは変身解除する。

「おい、この世界はさっきのような奴が他にもいるのか?」

「おそらく四体存在していて、そのうち二体を我が魔王が倒している。よって残りは一体だね」

「あと一体か。ん?」

僅かな時空の歪みを感じ取った士。どうやらウォズも同様のようだ。

「どうやらまた時空が歪んだようだ。おそらく悪い方向にな」

「まさか彼女達が!?私は彼女達のもとに向かう。君も着いてきたまえ」

「その様子を見るとやはり悪い方向になっているみたいだな」

ウォズはこの場に来た時と同じ方法でルシファー達のいた場所に戻り、士は少し時間を開けて灰色のカーテンを使い、ウォズがいる場所へ向かった。

ウォズとディケイドがアナザーソロモンを倒し、黄色の球体が消えた時。

その球体は3つの球体が埋まった石像の最後の穴に埋まる。

4つ埋まったのを見た深く帽子を被った女は、ポケットから様々な色に薄く輝いているブランクウォッチを取り出し近づける。

緑、青、赤、黄色の球体は光となってブランクウォッチに吸収される。

ブランクウォッチはより輝きが強くなった。

「ついに四大天使の力も揃った。あとはルシファー。君だけだ」

彼女はルシファーとビナーがいる場所に瞬間移動する。突然現れた彼女に驚く二人。

とても善意を持って現れたとは思えない雰囲気に、慎重に言葉を選んでビナーが話しかけようとする。

女はビナーが話そうとしているのを分かりつつも、時間を停止させた。

「ルシファー。君の力を完全にもらうよ」

女は七色に輝くブランクウォッチをルシファーの胸付近に近づけると、ルシファーが苦しそうな声を出しながらウォッチに吸い込まれていく。

歴史改編によって存在が消えかけていたため、あっという間に吸い取られてしまった。

「ビナー、ルシファーの存在がこれに移転した時点で君の存在は無くなるのだけど・・・勿体無いし君の力もついでに貰うね」

ルシファーを吸い込んだブランクウォッチをビナーに近づけさせ、同様に吸い込ませる。

ビナーを吸収し終えると、ブランクウォッチが変化していき、紫と黄色のウォッチが生まれた。

『ルアフィック!』

時間停止を解除し力を得た事に喜んでいると、ウォズが現れた。

「君は何者だい?」

「私?私はルシフェル。ルシファーに代わってストライクワールドの顔となり世界を再び創造する者さ」

ブラックハット（仮）改めてルシフェルはウォズに向かってそう名乗った。

創造の堕天使

「ストライクワールドの顔?」
「そう。現在ストライクワールドはルシファー、ソロモンをはじめとしたモンスター達が引っ張っている。その中に男のモンスターはノアしかいない。女型のモンスターばかり前にでる。私はこれが許せない」
「だから自らの手で一から作り直すと?」
そうだ。と言う変わりかルシフェルは先程手に入れたウォッチをジクウドライバーにセットする。
ジオウと同じ変身待機音が流れると、彼女の背後に赤、緑、青、黄色、紫色の天使の羽と同化した五つの時計が現れる。
ウォズもギンガミライドウォッチを起動し、ビヨンドライバーにセットする。
「変身」
『ファイナリータイム!』『ギンガファイナリー!ファイナリー!』
「素早い変身だ。戦いに慣れているゆえ為せる行動か」
ルシフェルはわずかに変身が遅れている。その隙にウォズは上空から隕石を彼女目

掛けて出現させた。
ジクウドライバーが一回転したと同時に隕石が彼女に追突。だがルシフェルは五つの羽で瞬時に自分の身を守り、隕石の存在そのものを削除した。
『ライダータイム!』『仮面～ライダ～ルアフィック!』
仮面ライダールアフィックへ変身したルシフェル。その姿は五大天使を模した姿に変化していた。
「お前が時空の歪みを起こした黒幕か。だいたいわかった」
遅れてやってきたディケイド。この場の状況を瞬時に理解しウォズに加勢する。
「私が一からストライクワールドを作り直す!それを邪魔するならばジオウの世界もろともお前らを破壊するっ!」
「世界を破壊するのは『世界の破壊者』である俺の役割だ。勝手に人の仕事を奪うのはやめてもらおうか」
アタックライド・ブラストを発動してルアフィックに光の銃弾を発砲する。
ルアフィックは自身を紫のバリアで囲い、攻撃から身を守る。
「あれはルシファー君の使っていたバリアか。厄介だな」
「ならバリアを破壊すればいい話だろ」
アタックライド・イリュージョンで6体に分身し再びブラストでルアフィックのバリ

アに発砲する。
ウォズもワクセイフォームへ姿を変え、ルアフィックの頭上から無数の惑星エネルギーを大雨のように降り注がせる。
一瞬の隙もない猛攻にバリアは徐々に削られていく。だが、それに集中していた故に背後からの攻撃に反応できなかった。
そう、ルアフィックはバリアから彼らの後ろにテレポートしていた。
バリアだけを独立するだけじゃなくその中身を偽装できるなんて考えてもいない。ディケイドはなんとか姿を保てていたが、すでにアナザーソロモン戦でダメージが蓄積していたウォズは変身解除に追い込まれてしまった。
「最初は君たちをここで消してやろうと思ったが、それは時間の無駄だと気づいたよ。さっさとストライクワールドという存在が完全に保たれたあの時間に飛んで作り直すとするよ。じゃあねお二人さん、このままそこで倒れてなっ」
ルアフィックは二人を黄色のバリアで囲むと、虹色に輝きこの場から姿を消した。
「おい、ウォズ。動けるか?」
「なんとか…　ね」
変身解除した士はバリアに触れてみるとビリッとした感覚に襲われた。どうやらこのバリアは電気が通っているようだ。

だがルシフェルは知らなかったのか、それともわざとなのか土が使えるあのオーロラは問題なく出現させることができた。

今すぐルシフェルを止めに行きたいところだが、その前にソウゴ達と合流しなければ止められないと判断した二人は、オーロラを使いバリアの外へ脱出する。

そして数秒後、ソウゴ達が帰還してきたのでここで起きた事を話した。

それを聞いたソウゴは「すぐに止めに行こう」と言ったが、ウォズの状態を見ると悩ましい表情になった。

そんな姿を見たウォズが「後方支援なら大丈夫だ」と発言する。ソウゴはウォズを休ませたいところだが、話を聞く限り事態は急を要するのでウォズには後方支援に回ってもらう、という形でルシフェルのいる時代へ向かうことになった。

となったものの、ルシフェルの言っていた「ストライクワールドという存在が完全に保たれた時間」がいつなのかわからない。

何かヒントは無いものか?と周辺を探すが何も見つからない。そんな時、ソウゴふとこんなことを言った。

「ねえみんな。俺、前にこのストライクワールドを夢で見たような気がするんだよね」

「なんだって?それは本当かい?我が魔王」

「うん。俺が初めてジオウに変身するちょっと前ぐらいに見た夢の話だから正確なこと

は覚えてないけど、平成ライダー達が怪人達と戦っていてそこで色々あった後、タイムマジーンで時空を旅していた時に見た気がするんだ」
「見た気がするってのが信用できないならないな」
「だがゲイツ君、我が魔王の夢にシノビやキカイの件があるだろう？随分前のこととは言え八方塞がりなこの状況に少しでも繋がるヒントにはなるはずだ」
「ならば取り敢えず行く価値はある。この場に居続けるよりは有意義じゃないか？それにさっきからこの世界の２０１８年が異様なほど歪んでいるようだからな」
士の意見に賛同する３人。タイムマジーンが出せない世界のため士のオーロラを使いストライクワールドの２０１８年へ向かう。

―２０１８―
「この執念、驚くばかりですね…　！」
ケテルに向かって攻撃を仕掛けるルシファーとウリエル。
「なるほど。それが友情ですか。素晴らしいハーモニーです」
ルシファーは己の腕と足で攻撃し、ウリエルは両手に持った剣でケテルに斬りかかる。
だが二人の攻撃を全て避けて吹き飛ばした。

「ですが・・・　もっとアップテンポに！」
「してあげるよケテル。この世界を作り直すためにね」
「ん？なっ!?」
　突如この場に居た3人以外の声が聞こえると、青と緑の混ざったエネルギーがケテルにダメージを負わした。
　ルシファーとウリエルは何が起こったのか一瞬わからなかったが、ケテルが動揺しているのを確認すると、二人一斉に再び攻撃を仕掛ける。
　それは動揺していた彼にクリティカルヒットし、彼はその場で生命活動を終えた。
「ケテル討伐おめでとう！」
「お前は一体？」
「私たち天使と同じオーラを感じますが」
「私はルシフェル。またの名を仮面ライダールアフィック。この世界を作り替える者さ」
「作り替えるだと？そんなことは・・・」
　させない。そう言おうとしたルシファーだが、自身の体が透けていっていのに気づき驚いた。
「ついでにこの時代の君たちの力も貰おうかな。んっ！」

ルアフィックが両手を前に突き出すと、ルシファーとウリエルの力がどんどんと吸い取られていく。数十秒後、二人はなす術もなく完全に吸われてしまった。
「よし、このままこの世界を作り替えるとしますか」
ルアフィックがベルトのウォッチのボタンを押そうとした時、先ほどまでルシファー達がいた場所に灰色のオーロラが現れ、そこからソウゴ達が出てきた。
まさかこの時代がバレるとは予想しておらず、わずかに動揺するルアフィック。それと同時に別の感情が心の底から湧き上がる。
「まさかここがバレるとはね・・・ 君たち鬱陶しいよ」
「鬱陶しいのはこちらのセリフだ」
「君が黒幕なんだね。悪いけど話はウォズと門矢士に聞いている。弁解の余地は与えない」
『ジオウ!』『グランドジオウ!』
ソウゴが戦闘準備に入ると、他3人もそれぞれ準備する。
『ゲイツ!』『ゲイツリバイブ疾風!』
『ギンガ!』
「「「変身!」」」」
「させるかわけないじゃん!」

ルアフィックが五大天使の力の一部を彼らに向け放つ。だがそれはルシフェルが変身した時と同じ現象が起きた。

『グランド！ジオ～ウ！』『リバイブ疾風！』『ギンガファイナリー！ファイナリー！』『ＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＥＣＡＤＥ』

煙が晴れると、そこには四人の仮面の戦士が立っていた。

王にふさわしい者

ルアフィックは無数の堕天使兵を召喚し、時空の歪みによって背後に現れた次元の穴に入っていった。

彼女を追いかけるために目の前にいる兵たちを倒す。四人は一斉に攻撃を開始する。

ジオウは右太もものレリーフに触れて音撃棒・烈火を取り出し、響鬼にカメンライドしたディケイドと共に烈火弾を飛ばす。

ゲイツは持ち前のスピードを生かし次々に堕天使兵を倒し、ウォズはエネルギー弾となった惑星エネルギーを放っていた。

だが敵兵は倒しても倒しても湧いてくるため体力が徐々に削られていく。

ライダーの召喚能力を生かし敵を倒しているジオウを見たディケイドはあることを思いつく。

「おい魔王、クウガと龍騎と電王とウィザードを出せ」

「え？なんで？」

「いいから召喚しろ」

ディケイドの指示に従い四人のライダーを召喚すると、ディケイドはバックルにカー

ドを装填しながらライダーたちに向かって「ちょっとくすぐったいぞ」と言う。
　すると召喚されたライダー達が次々に姿を変えていく。
「うわっライダー達がクワガタになったりドラゴンになったりした!?」
「俺の力で変形させた。こうした方があの兵を手っ取り早く殲滅できると思ってな」
　ディケイドのファイナルファームライドにより、クウガは『クウガゴウラム』龍騎は『リュウキドラグレッダー』電王は『デンオウモモタロス』ウィザードは『ドラゴンウィザード』に変形した。
「じゃあお手伝いよろしく」
「あいつらを倒せばいいんだな?よぉーし、いくぜいくｚ・・・ っておい!」
　ＦＦＲしたライダー達が堕天使兵にむかって行くが、デンオウモモタロスだけがディケイドとジオウの元にやってくる。
「おいディケイド!なんでクワガタやドラゴンがいる中俺がここにいるんだよ!俺は空を飛んだり炎を吐いたりできねぇよ!」
「お前ならあいつらに劣らずあの天使たちをすぐに倒せると思ってな」
「だとしても他にいただろ!カブトムシとか変な紫のやつとかよ」
「おいモモタロス、うしろ」
「うん?後ろ?って危ねぇ!」

堕天使兵が飛ばした矢が脳天に突き刺さるのを間一髪で避けたデンオウモモタロス。
今の攻撃によってディケイドから堕天使兵にイライラの矛先が向いた様だ。
「おいおい、売られた喧嘩は買うぜ・・・　おらぁ！いくぜいくぜいくぜ！」
地上に降りている堕天使兵に向かってデンオウモモタロスは走っていった。
「さて魔王、お前は先にあの次元の穴に入れ」
「入りたいのは山々だけど、敵が邪魔して・・・」
「俺があの穴までの道を切り開く。お前はまた奴らが湧いてくる前に一瞬で穴に入れ」
「できるの？」
「当たり前だ。俺は世界の破壊者、奴らを破壊してお前が通る道は作れる」
そう言うとディケイドはバックルにカードを装填し、次元の穴目掛けてホログラム状のカードが出現させる。
ライドブッカーを銃モードに変形して光弾を発砲する。光弾はカードを突き抜けていき、周辺にいた堕天使兵は一瞬にして破壊された。
そして再度奴らが湧く前に、自身を粒子化して次元の穴に一瞬で到着する。
だがある程度時間が経ってしまっていたためか、人一人も通れないほどに入り口が狭くなっていた。
ジオウは次元の穴を無理やりこじ開けて、浅くなっている時の空間を掻き分けながら

ルアフィックのいる場所へ向かった。

ルアフィックは何もない空間で世界がリセットされるのを待っていた。

今存在しているストライクワールドをリセットし、再度作り直す。そのために彼女はジオウの世界のテクノロジーを盗み、このストライクワールドに持ってきた。

ジオウの世界の技術を持ってくるにあたって、ストライクワールドとジオウの世界が融合を始めるのは予想できていた。まるで磁石の様に世界と世界同士が歪みを戻そうとする力があるのを知っていたから。

彼女が一番恐れていたのがオーマジオウが直接手を出すこと。誰も彼に敵わない絶対的強者が来ればその時点で計画は終了。だがそのリスクを負わないと世界が作れ変えられない。

結果、オーマジオウの手助けでジオウ達がやってきたという結果になり彼女にとっての最悪の事態は免れた。

後は若き日のジオウとその仲間さえ倒せばどうにかなる。世界の破壊者であるディケイドが干渉することは予想外の出来事だったがどうにかなるだろう。

と、ルアフィックは今まで行ってきたことを振り返っていると、閉ざされかけていた次元の穴が開かれ、そこから金色の何かが落ちてきた。

彼女は一瞬オーマジオウかと思い背筋が凍ったが、よくみると若い方のジオウだとわかり安心する。
「本当に鬱陶しいやつだよ、お前」
ルアフィックの心の中は安心と同時に不快感も込み上げてきて、忌々しげにジオウに向けてそれを吐き捨てた。
「あんたの計画を止めないといけないからね」
ジオウはただルアフィックを止める、その一心でここに辿り着いている。悪意を向けられても行動は止まらない。
『ファイズ！』『ダブル！』『オーズ！』『鎧武！』
各レリーフに触れると『仮面ライダーファイズ　ブラスターフォーム』『仮面ライダーダブル　ファングジョーカー』『仮面ライダーオーズ　プトティラコンボ』が現れ、鎧武のレリーフから火縄大橙ＤＪ銃の大剣モードを取り出した。
ダブルとオーズが先陣を切り、右腕に出現させたアームセイバーをルアフィックの首目掛けて斬りかかり、オーズは胴体目掛けてメダガブリューで切り裂こうとする。
それをバリアで防いだ後、風に炎を混ぜた魔法で返り討ちにした。
次にファイズが上空からキックを放つがそれも同じように対処されてしまった。
ジオウは粒子化し背後を取り、右手に装備した火縄大橙ＤＪ銃の刀身が水平に空を走

り、ルアフィックの背中を火花を飛ばしながら切り裂いていく。
そしてすぐに火縄大橙ＤＪ銃を投げ捨てると、左手で右腕にあるアギトのレリーフを触れて、大地の力の一撃を放つ。
何も混ざっていない真っ白な地面を転がっていくルアフィック。
ジオウは右足にあるブレイドのレリーフに触れ、重醒剣キングラウザーを装備する。
それを見たルアフィックは立ち上がり、剣を生成し構える。
お互いは剣を構いながら睨み合う。風も吹かない無音状態が数秒続く。
その沈黙をルアフィックが破りジオウに斬りかかる。それをキングラウザーの腹で受ける。
キィーンと金属同士の触れ合う音が無音の空間に響く。ジオウはこのまま押し返そうとするが、ルアフィックの右足で自身の足元を払われバランスを崩してしまう。
体勢を立て直そうとするジオウのその隙に光の力を纏った刃先が胸を切り裂いていく。その反動によって大きく吹き飛ばされ、さらに五属性の魔法の追撃を受ける。
ルアフィックはジオウに反撃させまいと高速移動してジオウに攻撃する。相手の猛攻に対応できず全ての攻撃をもろに受けてしまい、膝を地面についてしまった。
『フィニッシュタイム！』
宙に浮かび必殺待機状態になるルアフィック。このままではまずいとジオウはレ

リーフに触れるがどれも反応しなかった。
ライダーが召喚されない異常事態に戸惑う。犯人はジクウドライバーを一回転した彼女以外考えられない。
『ルアフィック!タイムブレーク!』
ルアフィックの背中に赤、青、黄、緑、紫の羽が生え、右足に虹色のエネルギーを纏う。
左足を右足に添えて右足を突き出し、五属性の羽の力を使いながらジオウを蹴り飛ばした。
「ぐわあああ!」
突き飛ばされたジオウは大きな爆発を起こし、変身を強制解除させられた。
「くっ… そ…」
ルアフィックはソウゴの元へ歩くと彼の背中に足を乗せる。そのまま力を徐々に入れていくとソウゴの顔は苦しそうになる。
「私の計画を止めに来た?はっはっはっ!それは今のお前には無理だ!たったライダー20人分の力を纏ったところで私に敵うはずがないじゃん」
「ライダーの力を馬鹿に… するな!ぐはっ!」
「馬鹿にはしてないさ。私の使っている力もライダーだしね」

ルアフィック背中に乗せていた足を下ろし右手でソウゴの首を掴む。
「最後のほうライダーの力使えなかったでしょ？それ私の剣の力のせい。これは元々持っていた天使を無効化することができる力をライダーに変換させたもの。これで君の厄介な力を封じたわけ」
ソウゴの腹を殴り、乱暴にソウゴを投げ捨てる。
ソウゴは何とか意識を保っていると、空の色が変化していることに気付いた。
純粋な白だった空に時間の穴が空いており、紫に染まっていたのだ。
「もうまもなくだ。もうまもなく世界はリセットされる。私の理想の世界に作り変わる！そしてその世界で私は唯一の女王になる！」
「女王・・・？」
「そう女王！作り変わった世界では全て私のおもうがままに動く。私に歯向かうものが現れればそれら全てを消す！そういえば君は王様なんだよね？自分の思うがままに動く世界を作る私って最高だと思わない？」
「思わ・・・ないっ！」
「は？」
最高最善の魔王であるソウゴは残った力で立ち上がろうとする。
まだそんな力が残っていたのかと驚くルアフィック。

「そんな世界、最高から一番遠い最低最悪の世界だ！王様は民のことを思い民に慕われ、民の幸せのためなら命をかけられる。それが王様だ！お前がやろうとしていることは民のことを一切考えない自己中で最低最悪の魔王だ！」
「民のことを思う？命をかけられる？そんな王様がいるわけがないよ。それに君はわかってない。このストライクワールドは異常なんだ。女ばかり前に出て活躍する。おかしいんだよ」
「前に出て活躍できるのは裏で頑張っている人がいるから・・・　その人たちがいて初めて前に出て活躍できる人が出てくるんだ。その裏で頑張っている人達は男も女もみんな平等にいるはず」
「裏での活躍なんて今はない。結局は表立って活躍したやつが評価される！」
「それでもいいじゃないか！みんなが助け合ってできた世界を否定して自分の都合の良い世界を作る・・・　お前に王の資格はない！」
『ジクウドライバー！』
　再びジクウドライバーを装着し、右手が淡く光り出すと黄金のライドウォッチが出現した。
　最高最善の魔王である印のウォッチ『オーマジオウライドウォッチ』
　それを起動させ、ジクウドライバーにセットする。

「俺が王になったのは世界を良くするためだ。お前のように自分勝手な理由でなったわけじゃない！」
「変身！」
「させるか!!!」
　ルアフィックが五属性の力がこもったエネルギーを飛ばすがかき消される。
　そしてジクウドライバーが一回転し、変身を開始した。
『キングタイム！』
『仮面ライダージオウ！オーマ！』
　大魔王の力を受け継ぎ、全ての時代をしろしめす最終王者、仮面ライダージオウオーマフォーム。
　最低最悪の女王になろうとしている者を止める王の名だ。

２０１８：最高最善の魔王

常磐ソウゴ。普通の高校生だった彼には魔王にして時の王者、オーマジオウとなる未来が待っていた。彼は２０１８年に仮面ライダージオウに変身し魔王への覇道を歩んでいた。

クォーツァーの妨害により一時は彼が生きた平成ごと消滅されかけたが世界を良くするための王の力、オーマジオウの力を継承し見事クォーツァーの野望を阻止した。

平成から令和に時代が変わり平和が保たれていたが、ルシフェルによって起こされた時空の歪みにより、ストライクワールドなる異世界がジオウの世界と融合され始めていた。

その世界で生まれたアナザーストライクを倒したが、それはルシフェルの力が蓄えられる罠でありルシフェルはジオウの世界のテクノロジーと6人の天使の力を使い『仮面ライダールアフィック』へと変身をする。

世界融合の原因であるストライクワールドのリセットを目論むルシフェルを止めるため、常磐ソウゴは『仮面ライダージオウオーマフォーム』へと姿を変えた。

おっと失礼、我が魔王の勇姿を未来永劫伝える為にこうして振り返っていたが、ここ

から先は皆さんにとってはまだ見ていない未来の出来事でしたね。

「まさかオーマジオウの力を持っていたとは予想外だよ・・・　っ！」

若いジオウがオーマジオウの力を持っていたことはルアフィックにとって大誤算の事案。なぜなら彼女のジオウの知識は平成ライダー１９人の力を継承した姿、グランドジオウまでだからである。

もっとも恐れていたオーマジオウの力が目の前にいるというこの状況に彼女は恐怖に支配されている。

ジオウは手を空に向けて突き出すと、世界リセットの影響によって紫に染まっていた空が純粋な白に戻る。ストライクワールドをリセットしようとした力の時を完全に消え去るまで戻したのだ。

あと一歩まで上り詰めたルシフェルの計画が一瞬にして崩れ去った。

「あともう少しだったのにっ！くそ！」

「言っただろ？お前には王になる資格はない。みんなが助け合い作ってきた世界を否定するお前に俺の世界もこの世界も犠牲にするわけにはいかない」

「うるさい！！！」

ジオウに対する恐怖心を抱えたまま怒りに任せて殴りかかるが、片手で受け止められ

てしまう。
その状態からジオウは衝撃波を放ちルアフィックは派手に吹き飛んだ。
自暴自棄になったルアフィックは無数の堕天使兵を召喚してジオウに突撃させるが、ジオウの元にたどり着く前に全て消滅した。
どうあがいても勝てないと分かっていても、諦めたくないルアフィックはジクウドライバーにセットしているライドウォッチのボタンを押し、今出せる最大限の技を発動する。
『ルアフィック・タイムブレーク!』
ルアフィックの体が虹色に輝き、この真っ白な世界が今にも世界が爆発しそうなほどに歪み始める。
ジオウは時を止めようと試みるが、あまりにも強大なエネルギーなため止めることができない。
ならばとジオウもD, 9スロットにセットしている『オーマジオウライドウォッチ』のライドオンスターターを押した後、ジクウドライバーのロックを解除して待機状態になる。
ジャンプするのと同時にジクウドライバーを一回転させると、ベルトから必殺技を放てる状態になった事を知らせる音声が流れる。

『キングタイムブレーク！』

背中にあるアポカリプス・オブ・キングダムの針が一回転し、ルアフィックに向かって右足に溜まった膨大な王の力を放つ。

向かってくるジオウの動きを止めようとルアフィックは全てのエネルギーを凝縮した光線を放つ。

そのまま二つの攻撃がが交わりジオウの勢いは止まってしまう。自暴自棄になり己の生命まで削った攻撃は最高最善の魔王の力に抗えるほどの威力。

今にも崩壊しそうな世界。このままの状態が続けばこの異空間とストライクワールド、そして自分の世界も壊してしまうと判断したジオウは所持しているオーマジオウのパワーの出力を上げ彼女の攻撃を押し返していく。

そしてそのまま勢いは止まらずジオウのキックをルアフィックは受ける。

「がぁぁぁぁあ!!!!!」

悔しそうな声で叫ぶルシフェルと彼女の持っていた仮面ライダールアフィックの力は爆発と共に跡形もなく消滅した。

「よっと･･･ あとはもう崩れるこの世界を元に戻すだけっと」

力と力がぶつかり起きた余波によって消滅しかけていたこの異空間をオーマジオウの力で時を戻し戦う前の何も無いまっさらな状態に戻った。

そのあとゲイツ達がいるストライクワールドの方に戻ると、体力を使い果たした3人がそこにいた。

変身を解除したソウゴは3人に感謝の言葉を述べ、ストライクワールドの歴史が元に戻るのを待っていた。

元凶を取り除き元のストライクワールドに戻るはずのだがいつまで経っても戻らない。瓦礫はそのまま落ちているし、外は壊滅状態のまま。ルシファーやビナー、ノアやソロモンたちも現れない。

一体どういうことなのか。ソウゴは何か分からないかウォズに問うと、ウォズはソウゴにこう問い返した。

「我が魔王、もしかしてオーマジオウの力を使っていないかい?」

ソウゴはルアフィックとの戦いの最中でオーマジオウライドウォッチを使いオーマフォームに変身したことを話した。

それを聞いたウォズがそれが原因ではないかとソウゴたちに言う。

「我が魔王、この世界にくる前に未来の我が魔王、オーマジオウに言われたこと覚えているかい?」

「えっと〜なんだっけ?」

「たしか自分が関与すると世界の侵食がより進むとか言っていたな」

　ソウゴのかわりにゲイツが答えると、ソウゴもどういうことかわかったようだ。
「そう、オーマジオウは時の王者。時空が不安定な世界にこの力が現れると大きな影響を与える。だがら未来の我が魔王は声だけで我々にストライクワールドのことを伝えた」
「なるほど、お前たちがこの世界に来た経緯がだいたいわかった。やつ自身が手を出さず影響の小さいお前たちに任せたわけか」
「そう。だが我が魔王はオーマジオウの力を使ってしまった。それ故に彼女を倒してもオーマジオウの力の影響でまた別の異変が起きてしまったということみたいだ」
「ってことはもしかして俺たちの世界がもしかして…？」
「もし私たちの世界がなくなっていればそこにいる門矢士を除きこの場には誰もいないはず。私たちが存在しているということは少なからず大丈夫だということだね」
「不安ならさっさと戻ればいいだろ？ほら」
　士は灰色のオーロラを出現させるとその中に入っていった。ソウゴたちもそれに続くように入っていく。
　オーロラの先にはソウゴ達が出発した時間とほとんど変わっておらず、周辺を見渡すが何か崩れているということも無く、至って平和な状態だ。
「俺たちの世界は救えたけど…　ストライクワールドの方は…」

両方の世界を救えず自分たちの世界のみ守った。とても悔しそうなソウゴ。
だがそんなソウゴだったが士の一言によって立ち直ることになる。
「おい魔王、どうやらあの世界は元に戻っているようだぞ」
「えっ!?」
「それは本当かい？門矢士」
「ああ。俺たちがいなくなった途端に羽の生えたやつらがわんさか溢れ出てきた。どうやら最後の異変とやらは俺たちのことだったわけか」
士の言う通り彼らがストライクワールドを離れた瞬間急激に世界が変化し始め、ビナーが四人の英雄をルシファーに紹介するところまで再生したのだ。再生するにあたって別世界の住人であるソウゴ達は邪魔になっていたらしい。
ソウゴは落ち込んでいた気持ちが一気に消え去り、ゲイツやウォズに「いえーい!」とハイタッチしていた。
「ふん･･･ この世界でのやるべきことはもう終わっているみたいだな。俺はここらでまた別の世界に行くとするか･･･」
ジオウの世界とストライクワールドを脅かしていた堕天使ルシフェル。彼女の野望は最高最善の魔王とその仲間の仮面ライダーによって阻止された。
一度は混ざり合おうとしていた二つの世界はまた独自の時間を歩み始める。その先

に待っているものは平和を脅かす脅威かもしれない。だが彼らがいるかぎり平和は保たれるであろう。
我が魔王は素晴らしい世界を作り上げていく。たとえ彼がいなくても平和な世界になるように。

「やり遂げたようだな」
何もない荒野で一人王座に座る男は一連の騒動を見ていた。オーマジオウである自分の力を継承した彼が世界の異変を止められないとは思っていなかった。
期待通り仲間達と自分の世界を救い、さらにストライクワールドを救った若きの日の自分がいることが柄にも無く嬉しいようだ。
「これからも王としてい続けるが良い。若き日の私よ」
「私の知らない歴史を作り上げていくお前たちを楽しみだ」